



接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーに関する研究

著者	許 挺傑
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7146号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125581

氏名（本籍）	許 挺傑（中国）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 7146 号
学位授与年月日	平成26年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーに関する研究

主	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川有里子
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副	査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	松崎 寛
副	査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	小野 正樹

論文の要旨

コミュニケーション・ストラテジー(communication strategy、以下ではCSと呼ぶ)とは、発話の産出や聞き取りの際に生じた問題を解決する方略のことで、産出の問題を解決する「発話ストラテジー」と聴解の問題を解決する「聞き返しストラテジー」に大別できる。本論文は、日本語母語話者と日本語学習者が会話する場面（以下では「接触場面」と呼ぶ）における日本語学習者の側のCSを記述し、CSの習得状況の解明を試みるものである。

分析の対象とするのは、初来日の中国人日本語学習者3名(中級学習者NNS1とNNS2、上級学習者NNS3)が1年間の留学期間において日本人との接触場面で用いたCSで、これらを以下の課題に基づき分析する。

- ①時間の経過とともに、コミュニケーション上の問題を解決するためのCSの使用がどのように変化するかを、量的・質的に考察する。
- ②日本語能力の異なる学習者のCS使用に見られる相違点のみならず、共通点も含めた総合的な考察を行うことで、CS使用に関わる要因を明らかにする。また、中国人日本語学習者を対象とした日本語教育におけるCS教育のヒントを探る。

本論文は以下の6章から成る。

第1章 序論

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第3章 本研究のデータと研究方法

第4章 接触場面における日本語学習者の発話ストラテジーの使用

第5章 接触場面における日本語学習者の聞き返しストラテジーの使用

第6章 全体的考察

第1章では、本論文の目的と意義を述べ、各章の構成と概要を提示する。

第2章では、CS研究の歴史的流れ、日本語教育におけるCS研究の内容と手法、その問題点などを概観し、本論文の位置づけを述べる。

第3章では、調査協力者のプロフィール、本論文で用いる会話データ、音声の文字化の原則、研究手法など

について述べる。

第4章では、日本語学習者の発話戦略の使用を調査し、その結果を基に発話戦略と習得との関係を考察する。調査の結果、時間軸に添った使用の量的・質的な変化と日本語能力の差によって生じる相違点・および共通点が明らかにされる。主な結果は次の通りである。

- ① 発話戦略の使用は、滞日期间中に日本語能力の伸びが大きかった学習者に比べ、伸びが小さかった学習者が多く用いている。
- ② 学習者 NNS1 の「共同解決型」発話戦略の「間接的アピール」の使用に、「弱い伝達」での使用から「強い伝達」での使用への変化が観察された。その結果、問題解決に至るまでの意味交渉が減少し、コミュニケーションがよりスムーズに行われるようになった。
- ③ 中級学習者は「自己解決型」よりも「共同解決型」を多用していたが、上級学習者は「自己解決型」のほうを多用していた。
- ④ 「自己解決型」の使用では、中級学習者が「パラフレーズ」を最も多く使用していたのに対し、上級学習者の場合は「再構築」を最も多く使用していた。
- ⑤ 「共同解決型」において、どの学習者も「非言語的な要素」を利用した「語彙や形の確認要求」と「間接的アピール」が圧倒的に多く、「言語的な要素」を利用した「直接的アピール」や「理解の確認要求」が少なかった。

これらの結果を基に、学習者の負担と CS 使用の関係、CS 使用とポライトネス理論との関係などについて考察する。

第5章では、日本語学習者の聞き返し戦略(以下、聞き返し)の使用について調査し、聞き返しと習得との関係について考察する。調査の結果、以下のことが明らかにされる。

- ① 時間軸に沿った聞き返しの量的変化は見られなかった。
- ② 時間軸に沿った聞き返し使用の質的变化に関しては、1 回目の会話で NNS2 の「感動詞型」聞き返しに中国語の影響と思われるものが見られたが、2 回目以降は見られなくなった。
- ③ 時間の経過と共に、最初に使用した連鎖パターンを残しつつ、新しい連鎖パターンが使用されるようになった。
- ④ 聞き返し連鎖には、問題の処理における認知プロセスの特徴を反映した連鎖パターン、少しずつ問題を解決していく連鎖パターン、同じタイプの聞き返しの連続使用による連鎖パターンなど、多様なパターンが観察された。
- ⑤ いずれの学習者も「問題の性質」を明示化しない「弱い聞き返し」である「単純エコー型(確認)」と「感動詞型」を多用し、「問題の性質」まで明示化する「強い聞き返し」の使用が少なかった。

以上の結果を基に、CS の使用の習得過程での変化の要因について分析し、「言語の固まり」として CS を使用する過程が存在すること、問題の性質によって効率的な聞き返しの連鎖を行うように習得が進むこと、コミュニケーションにおける「明瞭性」の原則を犠牲にして「経済性」と「規範性」を重視した選択を行うことなどについて論じられる。

第6章では、本論文で設定した研究課題に沿って、それぞれの章の考察で得られた知見を総合的に整理し、残された課題や今後の方向性について論じられる。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー (CS) の使用実

態を明らかにするとともに、CS 使用の変化と日本語習得との関わりについての考察を行う研究である。来日したばかりの中国人 3 名と日本人との会話を 9 ヶ月間に渡って調査した会話資料を分析するもので、従来の研究では充分になしえなかった縦断的な調査を行っているところに特徴がある。この調査により、日本語能力と CS 使用の関係という従来横断的データをもとに行われてきた研究を、縦断的なデータにより実証的に補強することに成功しているが、それに加えて、複数回の連続的な CS 使用という側面からの考察や、日本語能力の違いに関わらずに共通して見られる学習者の CS 使用の考察といった側面から、CS 研究に新たな知見を提供していることが、本論文の独創的で優れた点である。

特に、聞き返しストラテジーの研究において、個々の CS がどのような問題解決を目指すものかに着目し、その性質の違いによって、聞き返し連鎖に一定の階層的なパターンが存在すること、すなわち、「意味理解」の問題に特化した聞き返しは 2 回目以降でしか利用されず、1 回目の聞き返しとして利用されるのは、聞き取りの問題に対処するものか問題の質を明確に示さないものに限られることを明らかにした点、さらに、習得の進んだ学習者と進まない学習者の間で異なるパターンの聞き返し連鎖が用いられていることを明らかにし、その要因を考察した点が、第二言語習得研究に新たな知見を加えたのみならず、母語話者の CS 使用に関する研究や日本語教育への応用にもつながる大きな成果である。また、「発話ストラテジー」と「聞き取りストラテジー」のどちらにおいても、非明示的なストラテジーが優先されて用いられること、さらに、それが日本語習得の状況に関わりなく観察される現象であることを突き止め、これらの現象をコミュニケーションにおける「明瞭性」「経済性」「規範性」という原理との関わりで説明を試みた点も、本論文の独創性と斬新性が認められる優れた点である。

本論文は調査協力者が 3 名、観察期間が 9 ヶ月という制約の下での研究であるために、ケーススタディーの域を出るものではない。しかし、この種の研究は、ケーススタディーの成果を丹念に積み重ねて行くことで、より一般的な考察が可能となるものである。縦断的な研究は、資料収集の難しさから個人で成し遂げるには大きな限界がある。この問題を解決するには、共同研究者を募り、科研費などの助成金を得たプロジェクトを組織することにより、調査対象者数と調査期間を拡大し、大規模な調査を行う必要がある。今後はプロジェクト研究へとつなげる努力を続け、本論文で得られた知見をさらに発展させることを望みたい。

2 最終試験

平成 26 年 7 月 30 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。